

〔研究ノート〕

新約聖書の原語についての議論（2）

浜 島 敏[†]

— 目 次 —

序

I. セム語原典説

1. 1世紀におけるパレスチナの言語事情
2. 福音の伝播
3. ギリシア語の役割 (以上、前[137]号)
4. セム語原典説のさまざまな証言
5. 新約聖書の古い資料
6. 新約聖書に見られるセム語の特徴 (以上、本[139]号)

II. ギリシア語原典説 (以下、つづく)

III. 比較

1. セム語原典説とギリシア語原典説の比較
2. 考察

IV. セム語原典仮説

結語

[†] HAMAJIMA, Bin 四国学院大学名誉教授

4. セム語原典説のさまざまな証言

(1) 教父たちの証言

セム語原典説の主たる主張の一つに、初代教会の教父たちの言葉があげられている。ここで彼らの証言を纏めておく。これらの証言の多くは、エウセビオスの『教会史』の中で引用されている、いわば孫引きである。

① パピアス (60/75-130/163)、小アジアのヒエラポリスの主教。使徒ヨハネの弟子であり、「主イエスの口伝を収録した」と言われている。

「マッタイオスはヘブル語で託宣（ロギア）をまとめた。各人はその能力に応じてそれを解釈した」（エウセビオス『教会史Ⅲ秦剛平訳』39）。

※マタイが、イエスの言葉をまずヘブライ語で書き、それがいろいろな言語に翻訳されたと伝えている。「解釈」と訳されている語は、この場合「翻訳」のことと考えられ、ほかの訳では「翻訳」となっている（ネヘミヤ8:8参照）。

② エイレナイオス／イレナエウス、(130頃-200頃)、リオンの主教。最高のヘレニズム教養を受けながら、人文に至上権威を置かず、福音にこれを置いた。東西融和に努める。小アジア神学の大成者の一人。

「このようにしてペトロとパウロがローマに福音を伝え、教会を基礎づけていた時、マタイはヘブライ人の間にあって彼らの言葉で福音の書を（も）公にした。彼ら（ペトロとパウロ）の死後、ペトロの弟子・通訳であったマルコもペトロから宣べ伝えられたことを書物の形で、私たちに伝えた。またパウロの門弟ルカも彼（パウロ）から宣べ伝えられた福音を書物の中に書きつけた。その後、主の弟子で、またその胸によりかかったヨハネもアジアのエフェソにいた時、福音書を公にした」（エイレナイオス『異端反駁』『キリスト教教父著作集、3/1』「エイレナイオス3」）（エウセビオス『同上』3:24参照）。

「マッタイオスは、人のために彼らの言語で福音の文書を著わした。それはペトロスとパウロスがローマで伝道し、教会の基礎をつくっていた頃である」（エウセビオス『同上』V. 8）。

③ パンタイノス（?-190頃）、アレキサンドリア教校初代校長。後にインドで宣教。

「その頃、その学問のためにきわめて著名だったパンタエノスという人物が、アレクサンドレイアで信徒のための学校を統括していた。・・・彼はインドイのもとに行ったと言われ、文書記録によれば、キリストをすでに知っていたその地の人たちの間に、『マッタイオスによる福音書』がその地に彼が行く前からあったのを発見した。使徒の一人であるバルトロマイオスが彼らに宣教し、ヘブル語のマッタイオスの文書を残していったので、それがそのときまで残されていたのである」（エウセビオス『同上』V. 10）。

④ アレクサンドリアのクレメンス（150頃 - 215頃）、キリスト教神学者。パンタイノスの弟子。後にアレクサンドリア教校長。

「彼は『ヒュポテュボーセイス』の中で、すべての正典文書の内容を簡潔に語り、・・・彼は、『ヘブル人への書簡』について次のように言う。すなわち、それはパウロスの作であるが、ヘブル人のためにヘブル語で書かれ、ルーカスが注意深く訳し、ギリシア人のために公刊した。」（エウセビオス『同上』VI. 14）

⑤ オリゲネス（185頃-254頃）、アレクサンドリア学派の代表的神学者。若い頃から聖書を学び、多くの著作をなしたが、主著は旧約聖書の『ヘクサブラ』による原文批評である。

「・・・最初に書かれたのは、かつて収税吏をつとめ、後にイエス・キリストの使徒になったマッタイオスによるものである。彼はそれを、ユダヤ教から離れてキリストを信ずるようになった人たちのために世に出したのであって、ヘブル語で書いた」（エウセビオス『同上』VI. 25）。

「オーリゲネースは、聖なる文書をきわめて詳細に研究した。そのために彼は、ヘブル語さえも徹底的に学び、ユダヤ人の間で流布していたヘブル人の文字で書かれた原文書を手に入れた」（エウセビオス『同上』VI. 16）。

⑥ エウセビオス(260/265-339)、教会史の父。カイサリアにあるオリゲネスの図書館を自由に使うことによって、大著『教会史』を書き上げた。カイサリアの主教。オリゲネスの孫弟子。

「パウロスは、ヘブル人に母国語で書簡を送って語りかけた。そこである人びとは福音書著者のルーカスが、また、ある人々はこのクレームースが、その文書を翻訳したと言っているが、この方が真実らしい。クレームースの書

簡と『ヘブル人への書簡』の文体が類似しており、この二つの文書の思想の相違もわずかだからである」(エウセビオス『同上』III, 38)。

「マタイオスは、はじめはヘブル人に宣教していたが、他の人びとのところに行こうとしたとき、残された人びとのために母国語で彼の名を冠した福音書を書き、自分の不在を補おうとした」(エウセビオス『同上』III, 24)。「われわれの手もとに達しているヘブル文字による福音書は、・・・」(『ナザレ福音書』18)。

⑦ エピファニオス(315頃-403)、サラミスの主教。正統的教理の戦闘的擁護者。主著は『パナリオン』(異端反駁論)。

「マタイは新約聖書にヘブライ語とその文字を使って福音宣教を始めた」(エウセビオス『同上』III, 24)。

「彼ら(ナザレ派)は、ヘブライ語で書かれたマタイによる福音書の完全なものを持っている。そして、今もそれが最初に書かれたままのヘブライ語の文字で書かれた聖書を今も所有していることは確かである」(エピファニウス『パナリオン』29, 77)。

⑧ ヒエロニムス(340/50-419/20)、古代西方教会のすぐれた聖書学者。聖書のラテン語訳ウルガータの翻訳者。

「マタイは、レビとも呼ばれ、収税人であったが、使徒となり、最初にメシアの福音書をユダヤにおいてヘブライ語で書いた。・・・誰がそれをギリシア語に翻訳したのかは明らかではない。その上、ヘブライ語そのものは、今もカイサリアの図書館に保管されている。私も、この本をシリアの町ベロイアで今も使っているナザレ派の人に写させてもらうことができた」(ヒエロニムス『偉人伝』)。

「パウロは、ヘブライ人であって、ヘブライ語で、すなわち自分の言葉で流れるような文体で書いたが、このように流暢にヘブライ語で書かれたものが、さらに流暢なギリシア語に翻訳された」(ヒエロニムス『同上』5章)。

「さらにヘブル語の文書自体も、殉教者パンフィロスがきわめて入念に集めたカイサリア図書館に保存されており、わたしもまたシリアの町ベレア(ピリア、ベルサベ)において本書を利用しているナザレ人たちによって、筆写の機会を与えられた。その中で注意すべきことは、福音書記者(マタイ)が

自分で、あるいは主なる救い主の口を通して旧約聖書の証言を用いているところではどこでも、権威ある翻訳である七十人訳ではなく、ヘブル語文書によっていることである。・・」（「ナザレ人福音書」『聖書外典偽典別巻』1）。「カルデアか、少なくともシリアの言葉ではあるが、ヘブルの文字で書かれており、今日までナザレ人たちが「使徒たちによる」といい、多数の人たちが「マタイによる」と呼んでいるもので、カイサリアの図書館にも保存されている、・・・」（『ナザレ人福音書』2）。

「ナザレ人やエピオン人たちが用いている福音書において——この福音書はわたしが最近ヘブル語からギリシア語に訳したものであり、多くの人によってマタイ起源説が唱えられているものであるが、・・・」（『ナザレ人福音書』10）。

⑨ イシオダッド(9世紀)、ネストリオス派のヘダッダの主教。聖書注解を書いた。シリア学者からの引用が豊富で、聖書解釈上重要な資料となっている。

「彼（マタイ）の文書はパレスチナのカエサレアに存在しており、彼が自らの手でヘブライ語で書いたものであることは皆の認めているところである」（イシオダッド『福音書注解』1）。

総合すると、教父たちがすべての点で一致した見解をしているわけではないが、マタイ伝がまずセム語で書かれたということについては、おおよそ一致している。すなわち、ギリシア語の前にヘブライ語のマタイ伝があったことを証していることになる。教父たちの証言では、すべて「ヘブライ語」で書かれたとしているが、この場合の「ヘブライ語」というのが、正式のヘブライ語なのか、あるいは当時一般に話されていたとされるアラム語なのか、さらには、ヘブライ文字で書かれた他のセム語（たとえばシリア語）なのかについては、学者たちの間でも、主張が異なっている。ビヴィンは、どの教父も「ヘブライ語」としており、「アラム語」となっている記録はないことから、正式のヘブライ語であると主張している。他方、ラムサなどは、最も古い新約聖書はシリア語で書かれているとしている。いずれにせよ、少なくとも新約聖書の一部は、ギリシア語ではなく、セム語でまず書かれたという点では、共通した理解であることに間違いはない。

(2) タルムードの証言

初代教会の教父だけでなく古代のユダヤ教ラビたちも、福音書がもともとヘブライ語で書かれたということを暗に伝えている。『タルムード』の中では、新約聖書の写本をどのように破壊したらよいかということが、ラビたちの間で論じられている。その中で、『福音書』と呼ばれているもののの中には神の名が記されているので、破壊すべきであるとの主張がある。しかし、ギリシア語の本文には神の名は直接出ていなくて、「神」(セオス)「主」(キュリオス)が用いられているため、この論争の背後にはヘブライ語の新約聖書があったことを暗示している根拠となるというのである。

(3) ヘブライ語使用についての証言

イエスの時代、ギリシア語を話すものは軽蔑されていた。特に、ヘレニズムを推し進め、律法の書を焼き、ユダヤの慣習を捨てさせ、神殿をけがしたアンティオコス・エピファネスに立ち向かったマカバイ戦争(マカベア、マカバイオスとも言う、BCE167)の後(1 マカバイ記1章参照)、神殿を再奉献し(BCE164)、ハスモン王朝のもとに独立を獲得した(BCE142)直後であったこともある。外国の支配から脱出し、ヘレニズム的なものが廃された時期にあたっているからである。ギリシア語を使ったり、ギリシア文化を受け入れたりした者は逆に迫害を受けた。

① ヨセフォスの証言(37頃-100頃) ユダヤの歴史家。イエスの死の直後に生まれ、エルサレム炎上の生き証人である。彼の作品は、一世紀のパレスチナの事情を知る第一資料になるが、彼は、その作品をヘブライ語で書き、後にそれをギリシア語に翻訳している。また、自分はギリシア語が苦手であったとも証言している。

「私もギリシア語を習得し、その語構成を理解するため、かなりの努力をした。しかし私は自分の言語に長い間慣れてきたので、正確にギリシア語を発音することができない。というのも、わが国では外国語を学ぶことを奨励していないからである」『ユダヤ古代誌』21.11.2)。

② 死海写本の証言

紀元前3世紀から紀元後1世紀までの多数の資料を有する死海写本のほとんどがヘブライ語とアラム語で書かれていることも、この時代ヘブライ語が用いられて

いた証拠の一つとなっている。

③ バル・コクバの書簡

死海近辺のムラバートの洞窟から、バル・コクバの手紙が数点見つかったが、それはほとんどがヘブライ語とアラム語で書かれている。2通だけがギリシア語であるが、その発信人はギリシア名であり、そのうちの1通には、「ギリシア語で書いている」ことを詫びている。

④ 考古学の証言

過去50年の考古学の発達により、多くの出土品が発見され、第二神殿時代のイスラエルでは、かなりヘブライ語が用いられていたことが分かってきた。第二神殿時代のイスラエルの貨幣には、すべてヘブライ語が刻まれている。死海で発見された文書はBCE100年からCE70年までに書かれたものであるが、聖書以外の文書も見つかっており、写本の90%がヘブライ語であり、アラム語とギリシア語はそれぞれ5%となっている。

（4） パウロについての証言

パウロはタルソ出身のヘレニストであると指摘されることが多いが、彼は、若くしてエルサレムに出て、ガマリエルの指導を受けた。彼は自分が「ファリサイであり、ファリサイたち（複数形）の子」（使徒23:6）であると言っているが（新共同訳では分かりにくい）、少なくとも二代目ということであり、後ろの「ファリサイたち」は複数であることから、三代目以上であることを表しているとも言われる。要するに生粋のファリサイ派であるということである。また、自分を「ヘブライ人の中のヘブライ人」（フィリピ3:5）とも言っているが、これは、自分がヘレニストではないことの表明である。出身地タルソは確かにギリシア語も使われる文化都市であったが、住民は主にアラム語を話していたとされている。またパウロの初期の宣教はユダヤ人を足掛かりとしており、手紙は会堂で回覧して読むために書かれたということは、ユダヤ人に当てたものと考えてよい。彼の語法にも、セム語的要素があり、パウロ書簡ももとはヘブライ語で書かれたとする意見もある。

（5） 新約聖書中のセム語引用。

ヘブライ語からは「ハレルヤ」allelouia, 「アーメン」amen, 「ゲヘナ」geenna,

「コルバン」 korban, 「マンナ」 manna, 「パスカ」 pascha, 「サバト」 sabaoth, sabbaton, 「サタン」 Satanas. また、アラム語からは、「アッバ」 abba, 「エッフアタ」 ephphatha, 「コルバン」 korbanas, 「マモン」 mammonas, 「マラナタ」 maranatha, 「ラビ」 rabbi, 「ラカ」 raka, 「タリタ・クミ」 talitha koumi, 「エロイ・エロイ・ラマ・サバクタニ」 eloi, eloi, lama sabachthani. などの引用がある。他にも、「ケファ」「ゴルゴタ」「ガバタ」などの引用があり、これらの中には、イエスが発した言葉そのままが記録されているものも多い。

(6) セム語聖書写本の異読

ギリシア語の場合は、アレキサンドリア系とビザンチン系だけでも、かなりの違いがあることが分かっているが、それに比べ、アラム語などの写本は異読が少ない。旧約聖書に倣って、筆写が正確に行われ、古代の形がそのまま引き継がれていることを表している。ただ、この説の難点は、写本の総数がギリシア語に比べ、10分の1にも満たないということである。

5. 新約聖書の古い資料

(1) ユダヤ教側の資料

① シェム・トーヴ

6世紀から13世紀頃まで、ユダヤ教のラビたちが、キリスト教攻撃の文章の中でヘブライ語聖書を引用している。昔よりユダヤ人が、独自のマタイ伝を伝承しているという噂は教会にも知られていた。スペインに住むユダヤ人医者シェム・トーヴが、枢機卿ペドロ・デ・ルナ（後の教皇ベネディクト13世）と「原罪」などについて1375年12月26日に、論争した時の資料のまとめとして書いた本『試金石』の一部として、このマタイ伝が付されている。9つの写本が残っている。それまでもラビたちのキリスト教反論の論文はあったが、引用しかなかったのに対し、シェム・トーヴは、『試金石』の最後にマタイ伝の全文をヘブライ語で付している。これについては賛否両論があるが、ユダヤ人の中に連綿と伝えられてきたマタイ伝のヘブライ語原本から写されたものであると主張されている。

② デュ・ティレット・マタイ伝

1553年教皇ユリウス3世は、ヘブライ語で書かれた文書禁止令を出し、タルムードなどのヘブライ語文書を没収した。ちょうどイタリア旅行中であったフランス・ブリウの主教デュ・ティレットが、没収した文書の中にヘブライ語で書かれたマタイ伝があるのを見つけ、これを手に入れ、帰国後パリ国立図書館に収めた (Bibliothèque Nationale, Paris, Hebrew Ms. 132)。シェム・トーヴのものよりも、ギリシア語本文に近いが、シェム・トーヴと共通の部分もある。

その他、写本ではないが、古い印刷本として、1537年のミュンスター・マタイ伝がある。ヘブライ語で書かれ、セバスティアン・ミュンスターが、1530年代にスペインに住むユダヤ人から譲り受けたものである。彼はミュンスターの伝道によってキリスト教に回心した人物で、それまでキリスト教反論のために、キリスト教を学ぼうとずっと読んでいたものである。ミュンスターは、この写本には欠陥があると感じて、修正を加えているが、原本は失われたので、どこをどう修正したのかは不明である。この印刷本はイングランドのヘンリー八世に献上された。ラビ・ラハビ・エゼキエルが1750年代に出版したマタイ伝、1869年のエリアス・ソロウエイチクのマタイ伝もある。これらは、いずれもユダヤ人が所有していたもので、キリスト教反駁のためのものであった。これらに共通しているのは、「マタイ伝」であることである。

（2）キリスト教側の資料

キリスト教徒によってセム語に翻訳されたマタイ伝は20種類に及ぶが、その半数は以前ユダヤ教ラビであったか、ラビから教育を受けた者である。

セム語の古い資料としては、上記のヘブライ語を除いては、ほとんどがシリア語の資料である。シリア語には次のような翻訳がある。もっとも、アラム語とシリア語は同一言語の方言とも考えられており、ほぼ同じものと考えて良い。ただ、シリア語はシリア文字を使い、アラム語はアラム文字を使っているということで、シリア文字で書いたアラム語訳をシリア語訳ということもある。セム語には、広くは、エチオピア語なども含まれるが、今回それには触れない。

① 「使徒の教訓」(ディダケー)

最も古いキリスト教資料の一つは、一世紀の半ばに書かれたと言われている「使徒たちの教え」である。十二使徒が直接教えたと言われているが、実際に

は、使徒15:28の会議の後、その結果としてまとめられたものであろう。一般によく知られているのは、ギリシア語で書かれている (<http://reluctant-messenger.com/didache.htm>) ものであるが、それ以前にシリア語で書かれたものがあり (<http://www.essene.com/History&Essenes/didac.htm>)、そちらの方がより古い形を残していると言われている。この中には、「東を向いて」礼拝すべきことが指示されているが、東方とはエルサレムのことであるので、この起源が西方であることを暗示している。また週の最初の日に「礼拝と聖書朗読と聖餐」を執り行うように指示されているが、それは週の最初の日が「イエスが天より降り、復活し、天に昇り、再臨される日」だからであるとしている。現在の教会歴では復活日以外は、週の最初の日ではない。ただ、この資料は週の第一日を礼拝の日と定めたことを記録しているものとしては古い。

このディダケーとマタイ伝の記事が類似しているとも言われている。

② ディアテッサロン

四福音書調和として、最も古く有名なものである。160年?175年頃に、タティアヌスが完成したものである。「ディアテッサロン」という言葉自体はギリシア語であるが、原文はシリア語で書かれた。東方教会では、特に重要視され、アラビア語などにも翻訳された。現在、シリア語の写本は残っておらず、アラビア語が残っており、それからの英語翻訳がある。ディアテッサロンは一時期、4つの別個の福音書に勝り、シリア語の公式の福音書となった。

423年にキュロスのテオドレトス (393-457) は発見したディアテッサロンの写本200枚以上を処分してしまい、その代わりに4人の福音書筆者による別々の福音書を編集した。これは160年ごろのテキストを再現するのに有益だと言われている。これにより、当時すでにマルコ福音書の16:9以下があったことや、ヨハネ8章の「姦淫の女」の物語が含まれていなかったことなどがわかる。

③ 古シリア語訳

ディアテッサロンではない四福音書を含む新旧両方の聖書の最初のシリア語聖書は「古シリア語訳」と呼ばれる。5世紀の古シリア語福音書の写本が2つ（シナイ・パリンプセストとクレトニア福音書）存在する。これらはギリシア語本文の比較的自由的な翻訳である。「西方」系の影響を受けているが、表現にはディアテッサロンの本文を使用している。古シリア語福音書はおそらく3世紀ないし4世紀

に完成したものと思われる。これら二つの写本には、「使徒言行録」や書簡が含まれていないが、それらも存在していたと考えられている。エフレムのコメンタリーに基づいて、F. C. コニーベアが使徒言行録を、J モリトーがパウロ書簡を再構築している。2009年2月、北部キプロスの古物密輸業者が所有していた写本が発見されたが、これは2000年ほど前の聖書の可能性があると考えられている。ただし、その真偽について、現在専門家たちの鑑定を受けている。皮紙に黄金の文字で書かれている写本である。

④ ペシッタ訳

ペシッタ訳新約聖書の原本はディアテッサロンと古シリア語訳があったおかげで完成した。ペシッタ訳は、シリア語を母語とする教会が総合版聖書を作るため、古シリア語文書を再編集したものである。エデッサの主教（司教）ラブラ（Rabbula）が制作したと伝えられているが、現在ではそれは疑わしいと考えられている。5世紀初頭までにペシッタ訳はシリア語を母語とする教会の標準的な聖書となった。ペシッタ訳には『ペテロの第二の手紙』、『ヨハネの第二の手紙』、『ヨハネの第三の手紙』、『ユダの手紙』、『ヨハネの黙示録』は含まれていない。西方シリア教会では東ローマ帝国内の神学的な論争により、ギリシア語本文に近いシリア語聖書の作成が必要となり、マボッグのフィロクセヌス（Philoxenus of Mabbog）（d.523）がこうした流れに沿った新約聖書フィロクセヌス訳を作成した。それには、シリア語にない節や本文がギリシア語に合わせて含まれている。7世紀には標準ギリシア語に基づくシリア語聖書完訳が完成した。ハーケルのトマス（Thomas of Harkel）がフィロクセヌス訳に基づいて行った訳で、616年に完成し、ハーケル訳と呼ばれる。ペシッタ訳聖書は、現在ではシリアの伝統的な教会の標準シリア語聖書となっている。インド在住のシリア系キリスト教徒はシリア語をドラビダ語族のマラヤーラム語に翻訳したが、今もシリア語聖書が朗読されている。中東のシリア系キリスト教徒の間では、礼拝での朗読を除き、説教や聖書の個人研究では、アラビア語が一般的になっている。500年頃、パレスチナ地方のシリア語方言で書かれた（公同書簡と黙示録を含む）翻訳がある。1892年、シナイ山聖カタリナ修道院の図書館でアグネス・スミス・ルイスが発見したパレスチナ・シリア方言の「日課表」があり、その一部と考えられており、Syrpalと命名されている。

キリスト教側から最近翻訳されたヘブライ語他セム語の新約聖書もいくつかある。しかし、これらのキリスト教側による翻訳はいずれもギリシア語批評版からの翻訳であるので、本文批評にはほとんど役立たない。

(3) 古写本

① ハブール写本 (Khabouris Codex)

奥書き (colophon) にはニネヴェの司教の署名があり、164年の原本からの写しと書かれている。アラム語で書かれた現存する最古の新約聖書の写本である。1960年代に、アラム語の聖書の探求をしていたヨナン博士がユーフラテス川の支流であるハブール川沿いにある修道院で発見した。それを購入しアメリカに持ち帰ったものであり、製作年代は、1000年頃と見られている。シリア文字のうちエストラングロという書体で書かれたものであるが、これは100年頃、エデッサにおいて、「イエスの教え」を記録するために発案された書記法である。この写本は、現在はシリア正教会が保管している。もともとネストリウス派の所蔵であったとも言われている (<http://www.aramaicpeshitta.com/AramaicNTtools/Khabouris/intro.htm>参照)。

② 古シリア語写本

1842年にエジプトのニトリ砂漠にある修道院から出土した多数のシリア語写本の中にこれまでと違ったシリア語聖書の写本が見つかった。編集者の名を冠してクレトニア写本 (Codex Syrus Curetonianus (SyrC)/C) と呼ばれている。制作は4世紀頃であるが、ベシッタよりも古いものであるとされている (大英図書館所蔵、British Museum Add. No. 14451)。また、1892年、シナイ・カテリナ修道院で発見されたシナイ・シリア語写本 (Codex Syrus Sinaiticus (SyrS)/S) も同様に古シリア語で書かれた写本である (Mt Sinai Syriac Ms. No. 30)。製作されたのは2世紀の終わりとされている。また、2009年に一つの写本がキプロス島で発見されたが、いつごろのものであるか、現在調査が行われている。

③ ベシッタの写本

大英図書館所蔵のAdd.14479 (最も古い写本)、Add. 14459 (2福音書の最古の写本)、Add. 14470 (5/6世紀)、Add. 14448 (699/700) などは、ベシッタの写本である。350を超える写本が残っており、中には5世紀、6世紀に書かれたも

のもある。福音書はビザンチン型（公認本文）と共通点が多いが、使徒言行録は西方型に近いとされている。

（4） セム語からの英語訳

20世紀末から、古いアラム語やシリア語からの翻訳がつぎつぎと出版されて、一つのファッションにさえなっている。現在筆者の手元にあるだけでも、数種類の英訳がある。最も古いのがマードックによる『シリア語新約聖書』（1893）である。その他にラムサ『古代東方本文による聖書』（1933）が古い訳である。彼も同じくシリア語本文からの翻訳を行っている。1996年、キラズ著『シリア語福音書総合版：古シリア語シナイ写本、クレトニア写本、ベシタ訳、ハークリーン訳』（abbr. CESG）がブリル社から出版された。後続の第二版、第三版はゴルギアスから出版された。1901年、ピュージーとグウィリアムはラテン語訳聖書にベシタ訳の批評文を載せて出版した。それに基づいて、1905年、英国内外聖書協会はベシタ訳福音書の批評版を作成した。1920年には、新約聖書が完成した。1961年からライデンのベシタ訳協会がベシタ訳の最も総合的な批評版を分冊もので出版した。ハワード『ヘブライ語マタイ福音書』（1995）、パシュカ『アラム語福音書・使徒言行録』（2003）、ウィルソン『古シリア語福音書』（2003）、マギエラ『アラム語ベシタ新約聖書』（2005）、バウシャー『アラム語・英語対訳新約聖書』（2006）、ロス『アラム語・英語新約聖書』（2008）、『命の木福音書』（2011）、アレグザンダー『アラム語新約聖書』（2010）、トリム『ヘブライ語に根ざした訳』（2005）、パーキット『古シリア語福音書』（2011）、『デュ・ティレット本文マタイ福音書』（1990）、『誤訳マタイ伝』（2004）、エリコ『マタイのメッセージ』（1991）などであるが、これらはいずれも20世紀末から21世紀にかけて次々と翻訳出版されたものである。他にも、ショーンフィールドなど、その影響を受けていると思われる翻訳もある。『世界英語訳』のメシアニック・ジュー版もあるが、これはギリシア語ネストレ版に依っている。現在、益本重雄氏訳の『アラム語新約聖書マルコ伝』が1章から6章までインターネットで公開されている（<http://markbadlha.blogspot.com/>）が、それを除いては、日本語にはアラム語から翻訳された新約聖書はないように思う。おそらく日本では、これらがいまだに、いわゆる「異端的」なものと考えられているからではなかろうか。

(5) 異読（誤訳の可能性）

そもそもセム語で最初に書かれたものを、ギリシア語に翻訳するにあたって、何らかの誤訳あるいは誤読が生じたのではないかとするものが指摘されている。次に実例を挙げて示す。そのことが逆に、原典がセム語であったことを証明しているとも言える。少なくともセム語で読んだ方が理解しやすく、納得がいくものが多い。そこで、実際の翻訳でどう解釈され、どう翻訳されているのか、そのいくつかを比較しながら見ていく（詳しくは表II参照）。

○出エジプト34:29

（新共同）・・・自分の顔の肌が光を放っているのを知らなかった。

（光明社）・・・己が顔に角生ぜしを知らざりき。

原文の誤読から生じた誤訳として有名なのは、ヘブライ語の「光」（QaRaN）を「角（つの）」（QeReN）と読み間違えたラテン語ウルガータの翻訳である。古代のヘブライ語をはじめセム語の多くは、子音のみで表記してあるので、どの母音を付すかは、読者の判断による。もっともさらに古くは口頭で伝えられたものであり、読みは決まっていたのであろうが、書かれるようになって（その後も音読は重要な要素であったが）異読が生じた。

○出エジプト13:18

（口語）神は紅海に沿う荒野の道に、民を回らされた。

（新共同）神は民を、葦の海に通じる荒れ野の道に迂回させられた。

○使徒7:36

（口語）・・・エジプトの地においても、紅海においても、・・・

（新共同）この人がエジプトの地でも紅海でも、・・・

また、厳密に言うと誤訳とは言えないが、出エジプトのハイライトとも言うべきものに「紅海」を渡る記事があり、商業映画の最大の見せ場となっているが、ヘブライ語では、彼らが渡ったのは「ヤム・スーフ」（スーフ湖、「葦の海」の意）となっている。これをギリシア語七十人訳、ラテン語ウルガータがともに「赤い海」と翻訳した。それが、ヨーロッパでは一般的になり、KJVでは「紅海」（Red Sea）と翻訳した。Reed SeaをRed Seaに読み違えたという説があるが、英語の読み違いではない。口語訳までは、それにならって旧新約ともに「紅海」と翻訳されているが、新改訳、新共同訳などでは、旧約（出エジプト13：18など）

で「葦の海」、新約（使徒7:36など）においては、「紅海」としている。それぞれ旧約はヘブライ語から、新約はギリシア語から直訳した形になるが、同一の海を指しているかどうかわかりにくい。もちろん渡ったのは、同一の「海」であるので、同一の訳が好ましい。セム語新約聖書では、使徒言行録やヘブライ人への手紙の翻訳そのものが少ないが、LS、TRがRed sea、BS,MGが、Sea of Reeds、RTがYama-Suph、LXがSea of Soopとなっている。日本語では、新旧約ともに「葦の海」としているのは、今のところないようである。

○出エジプト13:18

以下、セム語からの英語訳について、直接例をあげながら述べるが、詳しくは別表を参照してほしい。

○マタイ 1:13（下線は筆者）

ギリシア語	ゼルバベルはアビウドを、アビウドはエリアキムを、（新共同）
ヘブライ語	ゼルバベルはアビウドを、アビウドは <u>アブネル</u> を、アブネルは エリアキムを・・・

イエスの系図が、3つの14代に区切られていながら、最後は13代しかないことで、いろいろな解釈がなされてきた。アブラハムからダビデまでが14代というのは、旧約と一致する。しかし、ダビデから捕囚までは一致しない。数人旧約の系図からは外されている。それまでしても14代に合わせたかったマタイの意図は何であったかはわからない。7×2という説もあるが、私はやはりヘブライ語の数字DVD（4+6+4）に合わせているという説を支持したい。それほど14にこだわったマタイが最後にキリストを13代にしたというのは合点がいかない。ところが、「アビウド」（**אבדו** ABWD）の後に「アブネル」（**אבנר** ABNR）が入って、全体で14代になっている写本がある（DT）。ヘブライ語では、「**נ**」ヌンと「**ו**」ワウ、「**ד**」ダレスと「**ר**」レシ」は似た文字であり、そのために、ギリシア語に翻訳するときに、似た名前のうち「アブネル」を飛ばしてしまった可能性がある」と解説している。「ダレス」と「レシ」の違いがどんなものであるかは、たとえばユダヤ人にとって、最も大切な言葉の一つ「主なる神は**יהוה** 'HD」（一）を「**יהוה** 'HR」（別）」と読んでしまうと、「主なる神は別にも」となって、他にも神がいることになり、とんでもないことになってしまう。一点一画も疎かにできないとはこういうことである。もっとも、14代については、11節の

「ヨシヤ」と「エコンヤ」の間に「ヨアキム」を挿入している写本がある。ギリシア語公認本文には含まれていないが、ロシア正教会の聖書、マケドニア語、ブルガリア語聖書などに含まれている。したがって、日本語のニコライ訳にも含まれている。しかし、これはあくまでも数合わせに過ぎないように思われる。それに比べると、ヘブライ語の読み間違いという方が、信憑性も高そうである。ただ、この読みは1写本にしかないので、全体的には疑わしい。

○マタイ1:11

（新共同）ヨシヤは、バビロンへ移住させられたころ、エコンヤとその兄弟たちをもうけた。

（ニコライ）イヲシヤはイヲアキムを生み、イヲアキムは、ワウィロンに徒（うつ）さるる前、イエホニヤ及び其兄弟（けいてい）を生み、

また、この件については、16節のマリアの「夫」に当たる言葉「ガブラ」は、アラム語では必ずしも夫を表すとは限らず、この場合はマリアの「父」を表していると考え、マリアまでで14代になると解説している本もある。いずれにしても、疑問の多い箇所である。

※Abnerを挿入しているのは、少数派であり、これだけで、本文から欠落したと考えるのは無理がある。にもかかわらず、マタイが14代にこだわっているのに、13代というのは納得しにくい。

○ローマ5:7-8（下線は筆者）

（新共同）＝（ギリシア語）正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。
善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれません。（8）しかし、わたしたちがまだ罪びとであったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、・・・

（セム語）悪い人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれません。（8）しかし、・・・

ギリシア語本文からは大変理解しにくい箇所であり、敷衍訳では、7節と8節の間に、一文を加えているものが多い（以下、下線は筆者）。

（尾山訳）いったい人が正しいことをしていたからといって、その正しい人のために死ぬ人は、まずいないだろう。ところで、だれかに恩顧を与えていた人があれば、あるいはその恩人のために死ぬ人はいるかもしれない。（8）しかし、私たちは正しい人間でも、だれかに恩顧を与えているような人間でもなく、罪びとに

すぎないのに、この罪びとのために、キリストは死んでくださった。・・

(柳生訳) 正しい人のために死ぬ者は、まずいないだろう。善人のためなら、自分を犠牲にする者も多少はいるかも知れないが、しかし、悪人のために生命を投げ出すものなど、とても考えられないだろう。(8) ところが、・・・

(ギャロット訳) 世の中には正しい人のために死ぬ者さえ、ほとんどいないだろう。心のあたたかい善人のためなら、進んで自分を犠牲にする者が多少はいるかもしれない。しかし、無法者のために命を投げ出す者など、とても考えられない。(8) ところが、・・・

またリビングバイブルは、「善い人」と「正しい人」を一つにして、全体で一文に凝縮している。

(リビングバイブル) たとえ私たちが良い人間であったとしても、だれかが自分のために死んでくれるなどとは考えてもみなかったでしょう。(8) しかし、・・

「正しい」はアラム語で「ラシナア」(רשיןא)、「悪い」は「ラシアア」(רשיןא)となり、大変似ている。「ヌン」と「アイン」の違いだけである。シリア語エストランゲラでは、さらによく似ている(「悪い」(ܪܫܝܐ)「義しい」(ܪܫܝܐ))。アラム語からギリシア語に翻訳するにあたって、文字を見間違えた可能性がある。内容的には、もちろん、「悪い」者と「善い」者とで対句になっているので、対句の多いセム語の特徴をよく表しており、こちらの方が納得いく。これを受け入れると、パウロ書簡も最初はセム語で書かれたということになる。

セム語訳では、LXのみがliving (merely existing、「ただ生きているだけ」と解説している)としているほかは全部「悪者」(wicked, ungodly)としており、「義人」となっているものはない。ごく自然の解釈である。The *Orthodox Jewish Bible*では、For only rarely will someone die for a tzaddik (righteous man) though efsher (perhaps) it is conceivable that some one will dare to die for the tzaddik.とどちらにも「義人」を使っている。「義人のために死ぬものは滅多にいないが、考えられないことではない」という意味か。なぜ、このようになったのかは不明であるが、ちなみに現代ヘブライ語訳新約聖書では、adam tzaddiq (a righteous man)/ haish hattov (the good man)であって、ギリシア語からの翻訳であるので、当然ギリシア語と同じである。ただ、adamとishが使い分けられている意味は不明。adamが「人類」、ishが「男」の

ように区別することもあるが、ここでは同義と考えて良さそうである。adamには、定冠詞がないが、ishにはそれがあるので、「不特定の義人」「特定の善人」と考えると、「不特定の義人のためには死ぬ者はないだろうが、ある特定の善人（たとえば、自分のために特別によくしてくれた人）のためには死ぬ者もあろう」という意味になる。

※ギリシア語本文は誤訳の可能性がある。goodはrighteousと対照にならないが、wickedとは対照となり、意味的にも整合性が高い。これは、セム語が先行する重要な証拠となりうる。が、同時にこれを受け入れると、(パウロ)書簡もセム語で書かれたということになる。

○使徒11:28-29 (飢饉の範囲)

(新共同)・・・大飢饉が世界中に起こると・・・ユダヤに住む兄弟たちに援助の品を送ることに決めた。

(TR) … a great famine would occur in all Ha-Eretz.

文字通り「全世界」に飢饉が及んだら、同じ飢饉に遭っているアンティオキアから援助物資は送れない。ヘブライ語の「エレッツ」は、「世界」(箴言19:4)のほかに、「全地」(ダニエル2:35)、「地」(ダニエル9:15)としても用いられ、さらに「イスラエルの地」(ダニエル9:6)の意味でも使われており、そう解釈すると、矛盾がない。(TR)には、詳細な注が付されている。

※実際の翻訳では、TRがHa-Eretzとしている他は、「全地」となっている。全地ということでは、ノアの洪水も、我々の言う「全世界」ではなく、メソポタミアから西の地域全土と考えることができる。その証拠に、洪水の後、ノアとともに箱船で生きながらえた動物以外にも動物がいたことが記されている(創世記9:10)。

○使徒8:27 (宦官)

(新共同)・・・カンダケの高官で、女王の全財産の管理をしていたエチオピア人の宦官が、エルサレムに礼拝に来て、・・・

(TR)… and he met a believer, who had come from Ethiopia…

「宦官」は(eunuch)は、去勢された官吏であり、このようなものは、律法によって、ユダヤ教に回心することも、神殿で礼拝することも許されてはいなかった(申命記23:1)。ところが、アラム語「マハイムナ」は、「宦官」と同時に「信仰者」を表す。セム語でも「宦官」(eunuch)と翻訳しているのが大部分であるが、RTとTRがbeliever、PSがabstainer、LXがtrusteeと翻訳している。

※いくつかの訳が試みられている中で、eunuchが最も多いが、ユダヤの伝統等を考え合わせると、誤訳の可能性あり。そもそもeunuchは、宮廷（特にハーレム）で仕える高官・侍従であるが、そのために去勢された。Abstainerは、「慎む人」で（禁煙家、禁酒家など）、この場合、eunuchの性関係を慎むという部分を強調したものであろうし、trusteeは「管理者」のことで、宮中での役割を言ったものであろう。

○ヨハネ12:11

（新共同）多くのユダヤ人がラザロのことで離れて行って、イエスを信じるようになった・・・

（TR）because many of the Judeans, on account of him, were believing more and more.

ギリシア語に基づいた訳では「離れて行って・・・信じるようになった」とあるが、「アーザル」はアラム語のイディオムでは、「ますます・・・するようになった」ということになるので、それによると「ラザロのことで、ますますイエスを信じるようになった」と読める。「信じるようになる」のに、「離れて行く」というのは納得がいかない。

※実際の翻訳では、「ますます」としているのは、TRのみである。この文の直前には、当局の手がラザロに及ぼうとしていることを伝えているので、それを恐れて、人々は離れていった、と見ることもできる。しかし、それならばなぜ、「信じる」ようになったのかの説明が困難である。

○マタイ23:3（誰の命令か）

（新共同）彼らが言うことは、すべて行い、また守りなさい。しかし、彼らの行いは、見倣ってはならない。

（TR）And all that he says to you observe and do. …

シェム・トーヴの本文のうち二つでは、「彼が」（単数）言うことを聞き、「彼ら」（ファリサイ）の行いを真似するな、となっている。すなわち、彼らが聞くべきはファリサイの言葉でなく、「モーセ」の言葉であるべきである、としている。（TR）では、この部分にかなり詳しい注がついている。内容的には、確かにその方が納得しやすいが、ギリシア本文と同じくthey（すなわち、「ファリサイ」）としているのがほとんどであり、he（すなわち「モーセ」）としているのは、TRのみである。RTが脚注にheを入れている。

※大部分の翻訳がtheyであり、特にheにする必然性はない。彼ら（ファリサイ等）の言うことは正し

いことに基づいているので聞くことは重要であるが、その行いは正しくないので真似をするな」で十分理解は可能である。

○マタイ1:25 (イエスの命名者)

(新共同) ヨセフは・・・そして、その子をイエスと名付けた。

(KJV) ...and he called his name JESUS.

(ER) ... then she named him Jesus.

日本語訳では、ほとんど主語は省略されていて、命名者がはっきりしない。ただ、ヨセフの行動の続きとして書かれているので、ヨセフと読むのが自然であろう。英語では、heとしているものがほとんどであり、命名者がヨセフであることをはっきりと表している。ところが、セム語訳では、「彼女」すなわちマリアとなっているものが多い。ギリシア語では動詞を性によって区別しないので、男女どちらとも解釈できるが、セム語では区別をしなければならない。ヘブライ語新約聖書でも、現行ギリシア語からの訳ではheとしている。セム語ではheとしているのは、TRとTLのみ。DLは、they、MDは主語を省略している。残りはすべてsheとなっている。

※セム語の聖書では、動詞の語尾に女性形が用いられていることから、命名者は「マリア」であることがはっきりしている。ヨセフもマリアもともに幼子を「イエス」と名付けるよう指示を受けているので(マタイ1:21、ルカ1:31)、どちらも可能であるが、セム語のことを考えると、命名者はともにsheが相応しいようにも考えられる。DLがtheyとしているのは、両親でつけたということなのか、あるいは一般的な意味で「イエスという名前がつけられた」という意味なのかははっきりしない。

○マタイ3:4 (ヨハネの食事)

(新共同) ...いなごと野蜜を食べ物としていた。

(Hogg-Diatessaron) and his food was of locusts and honey of the wilderness.

バプテスマのヨハネの食事については、「いなご」と「野蜜」が一般的であるが、東方教会の伝統では、ナジル人は菜食主義者であるため、ナジル人と考えられているヨハネは、「いなご」を食べるはずがないということである。「ディアテッサロン」では、「山の蜜と乳」または「蜜と山の乳」(乳と蜜)と読める。ホッグの翻訳は、本文では「いなごと野蜜」とあるが、「ディアテッサロンの初版では、

山の蜜と乳あるいは、蜜と山の乳と書かれている」という注がついている。「イショダッドの注解」では、「蜜と山の乳」という解釈があることを述べ、同時に「パースニップ」（野菜の一種）と解釈する者もいと書かれている。外典「エビオン派福音書」では、ギリシア語のakrides（いなご）をenkridesと読み替え、オイルと蜜を使った菓子的一种と考えている。さらに「いなごまめ」（carob）のことであるという解釈もある。これはヨーロッパで生まれた解釈で、この豆のことを「ヨハネのパン」（John's bread）と呼んでいる。そして、「いなごと野蜜」だけでは、栄養が足りないので、「いなごまめ」を粉にして、それでパンを作って主食として食べたであろうと、ヨーロッパらしい合理的な解釈をしている。リュ・モーセは『聖書の世界が見える』において、この解釈を受け入れている（なお、彼は列王下6:25の「はとのふん」も同様にいなご豆のことであるとし、貧しい人たちの非常食であるとしている）。景教文書ではヨハネは「生野菜と蜜」を食べていたとされている。いずれにせよ、ヨハネが菜食主義であることを前提として、それに合わせようとする解釈のように思われる。今回検討した翻訳では、ほとんど「いなごと野蜜」のままであるが、RTのみが脚注にparsnipを入れている。

※ヨハネの食事は単純に「いなごと野蜜」であったとするのが、最も妥当であろう。わざと他のものにするのはこじつけであって、妥当性がない。ほぼlocust(s)で一致している。RTが脚注にparsnipの可能性を挙げているが、これは故意に菜食主義に合わせたものであろう。

○マルコ14：22

ユダヤの文化を知らないことから起こる誤訳で、先に述べた「宦官」の問題も、次に挙げる「レプラ」の問題も、ユダヤの慣習に照らし合わせて分かることである。

（口語）・・・パンを取り、祝福してこれをさき、・・・

（新共同）・・・パンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、

「最後の晩餐」の席で、ほとんどの訳では、イエスが「パンを取り、祝福して、これを裂」いたことになっている。まるで、パンを祝福（賛美）しているようである。しかし、ユダヤ人は、神以外のものを決して祝福（賛美）しない。では、そのように書けば分かりやすいが、あまりにも当たり前のことなのであえて書くことをしないで、「神を」という目的語を省いている。その点、新共同訳は、ユダヤ人の習慣から、「パンを取り、賛美の祈りを唱えて、・・・」としている。

また、山浦玄嗣『ガリラヤのイエシュ』では、「皆が食事をしていたとき、イエシュさまはパンを手にとって、まず神様の恵みを讃え、・・・」となっている。

(6) 母音の読み違い

セム語は基本的に子音のみを表記し、母音を書かないので、母音のつけかたで違った意味になる可能性がある。ギリシア語に翻訳するにあたって、読み違いがあった可能性がある。

○マタイ19:24 (ラクダかロープか)

(新共同)・・・**金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。**

典型的な例としてよく引き合いに出されるものであるが、GMLをどう読むかによって、「らくだ」(GaMLa)とも「太い紐」(GaMaLa)ともなりうるということである。特に、このロープは、船をつなぐときなどに用いられたということから、漁師をしていた弟子たちには理解しやすかったと思われる。針の穴に対して「ラクダ」は不自然であるが、「太い紐(ロープ)」では、難しいことに変わりはないとしても、比喩としてはわかりやすいということである。「らくだ」というのを、城壁のくぐり戸のことではないかという解釈もある。セム語では、camel(10), rope(4), large rope(3)となっており、「ラクダ」が主流ではあるが、「ロープ」としているのが、あわせて7つあるのは注目に値する。

※数としては「ラクダ」が多いが、40パーセント以上がropeを支持しているし、内容的に考えてみても、ropeの方がわかりやすく、誤訳の可能性あり。

○マタイ26:6 (レプラ患者か壺作りか)

(新共同)さて、**イエスがベタニアで重い皮膚病の人シモンの家におられたとき、**
「レプラ」を患っている者は、市内に住むことはできない。家を持ち、財産を持ち、僕まで雇うことは不可能である。まして、客人を招いて宴会などできない。そこで、「以前レプラを患っていたが、その後癒やされた」シモンという説明がなされることがある。しかし、それは考えられないことであるとラムサ等セム語原典説をとる者は書いている。それよりも、ヘブライ語のGBR(גבר)をGaRBaと読めば「レプラ」であるが、GaRaBaと読めば、「壺作り」となり、問題は解決するとしている。翻訳では、leper(9), jar merchant(3), potter(2), Metzora(2), leperlike(1)となっている。「メツォラ」(「ツァラート」と同根)が2例ある。

※leperの方が圧倒的に多いが、ユダヤの習慣等を考慮すると、内容的には、potterの可能性はある。

○マタイ 7:6

（新共同）**神聖なものを犬に与えてはならず、また、真珠を豚に投げてはならない。**

（RT）You should not hang earrings on dogs and you should not place your pearls before pigs …

同じように、母音の違いによって、QDŠをQeDaŠa（輪）と読むべきところをQuDŠa（聖）と読んでしまった誤訳であり、「犬に輪を着けるな、豚の鼻を真珠で飾るな」と読むべきであり、箴言11:22を連想させる、とする解釈もある。holy（7、内holy things, what is holyなどを含む）、earrings(4), qodesh(2), holy flesh(1), conservations(1), sacrifices(1)となっている。qodeshとholy fleshを含めると、holyが9となる。

※holyが多いが、対句と考えると、earringsとpearlsの対称があって、わかりやすい。holyの意味をholy flesh, sacrificesと採っているものがある。conservationsの意味がはっきりしないが、犠牲のために取っておいたものという意味であるとするれば、holy fleshとも合わせて、同じ意味であるとも考えられる。さらにholyそのものがその意味を表しているのかどうか、はっきりしないが、単なる対句と考えると、earringsの方がふさわしい感じはする。

○マタイ 8:22

（新共同）・・・**死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。**

聖書の中で、理解しにくい言葉は多い。そのためにさまざまな解釈が施されている。その中でも「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい」というのは、その筆頭にあげられるかもしれない。イエスが非情な人間であるという批判にもなりかねない。まず、「父を葬る」ということは、必ずしも父が死んだことを意味していない、セム語では、老齢者を「死者」ということがあるので、老齢に達し、死が近い父の世話をしたいという申し出であると解釈しているものがある。一般的に、老人は若者が世話を見るのが常識であった。死者とは「霊的に死んだ者」とであるという解釈があるが、（山浦は「死人を弔うのは、[生き] 死人どもに任せておけ」と翻訳している）。ここでは霊的な問題を取り上げているわけではないので、この解釈には無理がある。ヘブライ語のMT (מן) は、母音によって、「人びと」（ハムティーム）とも、「親戚」（ハマティーム）とも、

「死者」（ハマーティーム）ともなるので、「死者（老人）の世話は町の人々に任せなさい」「・・・近親者に任せなさい」「・・・死者に任せなさい」のいずれにもとれると解釈しているものもある。その他にも、今までに「・・・墓掘りに任せなさい」、「・・・若者に任せなさい」など、さまざまな解釈がなされてきた。

※現在英語に翻訳されているものを見る限り、欄外注に別の訳が示されているものはあっても、本文はすべて「死者はその死者に葬らせよ」となっている。

○マタイ5:43-44

（新共同）『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言うておく・・・

（山浦）・・・加えて、俺は言うておく・・・

マタイ5章21節から48節までには、律法に対するイエスの新しい解釈が次々と語られている。ところが、元来のギリシア語に基づいた翻訳では、一般に流布している解釈と新しい解釈を結ぶ接続詞は、de「しかし」であった。要するに、それまでの解釈に反対の意見を述べたように書かれている。しかし、5章17-20節の言葉が前文になっている以上、イエスは決してこれまでの考えを否定しているのではなく、むしろ、それまでの解釈に付け加えて「それはそうとして、それに付け加えて、私は言う」というはずである。ヘブライ語のveは、逆接に限らず、順接も表すもっと幅が広い接続詞である。もっとも、ギリシア語のdeも逆接に限定されているわけではないが、ヘブライ語veが順接を基本としている接続詞であるのに対し、ギリシア語deは逆接を基本とする接続詞であるということである。（前島誠『ナザレ派のイエス』147頁参照）。山浦は、珍しく「加えて、この俺は言うておく」と翻訳している。山浦の翻訳は、マタイ6章22節からの場所も、ヘブライ語の慣用語をしっかりと翻訳して、「気前の良さ」「吝嗇（けち）」と翻訳しているのは、さすがである。彼の翻訳は単なる物珍しさだけではなく、しっかりした研究に基づくすぐれた翻訳である。そもそも歴史的に見るならば、イエスは律法に新しい解釈を与えたユダヤ教ラビの一人に過ぎず、そのようなラビは別に珍しいことではなかったはずである。これをことさらにユダヤ教とは別のものであることを主張し続け、ユダヤ教を「敵視」した初期キリスト教に責任がある。イエスの教えを、ギリシア語で書く（あるいは翻訳する）にあたって、順接を逆接にした責任は、むしろキリスト教の側にあると言っているのかもしれない。

※現実の翻訳では、セム語からはbutのみである。

○マタイ 6:19-24（22-23）

（新共同）**目が澄んでいれば、あなたの全身が明るい**が、**濁っていれば、全身が暗い**。

（山浦）腹の太さと気前の良さに輝く目玉は体を照らす灯火（ともしび）のようなものだ。腹の太さと気前の良さでお前さんの目玉がキラキラ輝いていれば、頭から足の先までお前さんの体も後光（ごこう）がさして光り輝く。反対に、吝嗇（けち）のためにお前さんの目玉がドロと暗く曇っていれば、頭から足の先までお前さんの体も真っ暗だ。・・・。

この部分は、全体的に、イエスは「富」の取り扱い方を教えておられる箇所である。まず「富」は天に蓄えるべきものであると教え、最後に、「神と富」の両方に仕えることは無理だ、と教えておられると考えられるが、途中、「目」の話が入っているのは、いかにも唐突である。その部分だけを取り出せば、一つの話としてはまとまってはいるものの、全体としてのつながりがない。全体を一つと考えると、次の「だから思い悩むな」という教えに自然につながっていく。ヘブライ語では、「目が良い」というのは、「気前の良い」ことであり、「目が悪い」というのは、「吝嗇（りんしょく）」を表す慣用句である。富の使い方の教えの中の一部と考えられる。この成句はマタイ20:15にも使われているし（山浦「・・・あるいは、お前さんは俺が太腹だからって、けちくさい焼きもちを焼いているのか？」）、箴言22:9でも、この慣用句が使われている。直訳すると、「幸いなるかな、目の良い人は」となる。

※セム語からの英語訳では、sound, single, bright, straight, open, faultless, illuminated, whole/ (bad, evil, dim, darkness, diseased)など様々な翻訳が見られるが、generous, stingyに当たる翻訳は見つからない。「ディアテッサロン」では、unimpaired/ worthlessとなっている。

いろいろ例をあげたが、（他にも例は多く挙げられている）もちろん、これらすべてがセム語による解釈の方が正しいとは言えないかもしれないが、大変興味があるし、またその可能性を含んでいるように思われる。今後のさらなる研究に期待したい。ビヴィンの『イエスはヘブライ語を話したか』は、ほぼ全巻でこのことを取り扱っているが、特に第一部6章「誤訳による神学上の誤り」と第二部「誤解されたイエスの語録」はこのことに当てられている。

(7) 旧約聖書の引用

① マソラ本文との一致

新約における旧約の引用の多くが七十人訳からであると言われるが、逆に、七十人訳でなくマソラ本文と一致し、ヘブライ語でないと説明のつかない引用もある。ギリシア語では意味が不可解なものも、セム語の綾で理解できることがある。

○マタイ 2:15

「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」(ホセア11:1)

七十人訳では「わたしの子たちを・・・」と複数で書いており、出エジプトを暗示しているのに対し、ヘブライ語では単数であり、メシアを指している。ここは、イエスを指しているのであるから、当然ヘブライ語の単数が正しく、この引用がヘブライ語からなされていることが分かる。

② ギリシア語(七十人訳)からの引用

旧約の引用が、ヘブライ語原典からではなく、明らかにギリシア語七十人訳からの引用であることがはっきりしているものがある。

○マタイ 18:22

あなたに言うておく「七回どころか七の七十倍までも赦しなさい」

これは、創世記4:24からの引用であるが、ヘブライ語では、「カインのための復讐が七倍なら、レメクのためには七十七倍」となっているが、七十人訳では「カインに起因する復讐は七倍にされたのだから、レメクに起因する復讐は七十の七倍」となっていて、明らかにギリシア語からの引用である。セム語訳では、 70×7 (7)、77 (3)、 70×77 (2) であるが、他にseventy times seven seven が2つの翻訳で用いられている。その一つであるERには、注として(Eastern saying which means indefiniteness)と記載されている。また、seventy sevensというのがBKで見られるが、意味がはっきりしない。

③ 新約の引用が旧約の記事と不一致の場合

これは、誤訳ということにはならないが、説明が必要になる。注解書では、つじつまを合わせるために、かなり苦しい説明をしているものもある。

○マタイ 23:35

(新共同)・・・バラキアの子ゼカルヤの血に至るまで、

2歴代24:20-21（祭司ヨダヤの子ゼカルヤを・・・）の「ヨダヤ」の子ゼカルヤを、引用では「バラキア」の子としている。ゼカリヤ書1:1「ベレクヤの子である預言者ゼカリヤ」との混同がある。ヒエロニムスは、彼が見たヘブライ語のマタイ伝では、「ヨダヤ」の子「ゼカルヤ」となっていると伝えている。（TR）では、注に「間違いである」と書いている。新改訳の注では、「このザカリヤは、ベレクヤの子の預言者ザカリヤとは別人」となっている。

○使徒7:14

（新共同）・・・父ヤコブと七十五人の親族一同を呼び寄せました。

ヤコブの家族の人数が、創世記46:27では「エジプトへ行ったヤコブの家族は総数七十名」となっており、使徒（75人）とは異なる。これは、七十人訳を引用したからだと言われるが、セム語でも「75人」となっている。「家族」と「親族」の違いか。新改訳は、基本的に聖書には誤りがないという立場を取るため、注をつけて説明をしている場合がある。このところの注には「マナセの子と孫、エフライムの二人の子と一人の孫をも含めて七十五人としたのである」と解説されている。しかし、翻訳だけからでは、彼らを含んでいるのかどうかは、明らかではない。

○マタイ 27:9

（新共同）こうして、預言者エレミヤを通して言われていたことが実現した。

ギリシア語新約聖書では、預言者エレミヤと書かれているが、この引用はゼカリヤ書11:12-13からであって、間違っている。アラム語聖書では単に「預言者」となっていて、名前は明記されていないものが多数であるが、シェム・トーヴの写本の中には、「預言者ゼカリヤ」というものもある。（TR）は、注において、エレミヤ書18:2、19:2、11、32:6-9との混乱があるだろうと書いている。新改訳の注解では、ゼカリヤとエレミヤの両方から引用されており、有名な方を一人だけ代表としてあげたものであると解説している。新改訳では「この引用句は、ゼカリヤとエレミヤの預言を組み合わせたものである。このような場合、有名な預言者の名を一人だけあげるのが普通なので、ここではエレミヤの預言とされている」と注をしている。

6. 新約聖書に見られるセム語の特徴

(1) セム語の言葉の綾、言葉遊び

○マタイ 2:23

(新共同) ナザレという町に行って住んだ。「彼はナザレの人と呼ばれる」と・・・

ギリシア語七十人訳では、旧約聖書に該当する聖句が見当たらない。七十人訳からの引用ではなく、ヘブライ語からの引用と思われる。ヘブライ語では「枝」を表す語が、NZRであり、NZRT (ナザレ) との言葉の綾が使われており、エッサイの若枝であるメシアを指示しているとされている。(イザヤ11.1「エッサイの株からひとつの芽が萌えいでその根からひとつの若枝が育ち」)。初期のキリスト教徒は「ナザレ派」と呼ばれていた。

○ヨハネ8:39

(新共同) 彼らが答えて、「わたしたちの父はアブラハムです」というと、イエスは言われた。「アブラハムの子なら、アブラハムと同じ業をするはずだ。

(もし、あなたたちの父(アブ)が「(アブ) ラハム」であるならば、「(アブ) ラハム」がした(アバド)ようにしなさい(アバド)。

(Aramaic) enw wamryn lh abwn dylh abrhm hw amr lhwn yšwe alw
bnwhy hwytwm abrhm ebdwhy dabrhm ebdlyn hwytwm

ここでは、ab/ebという音が、繰り返し使われている。このような言葉遊びがあることは、原文がセム語であった証拠である。ギリシア語ではこのような綾はない。もっとも、有名なペトロの信仰告白の後、イエスが宣言された言葉の中にあるペトロとペトラのような言葉遊びは、ギリシア語で可能である。

(2) セム語系本文の異読

セム語本文の内、公認本文とも、校訂本文とも、さらにウルガータとも異なったものが見られる。

○ ルカ2:14

(MD) Glory to God in the highest [heavens], and on earth peace and good hope for men.

(BK) Glory to God in the highest, and peace in earth, and favour to

the sons of men.

(LS) Glory to God in the highest, and on earth peace and good hope for men.

(PS) Glory to God in the highest [heavens], and on earth, peace, and good hope to the sons of men.

(WL) Praise to God in the highest, and peace on the earth and good will to men.

(TR) Glory to Eloah in the highest and upon earth, shalom and a goodwill to the sons of men.

(MG) Glory to God in the highest and on earth, peace and a good hope to men.

(BS) Glory to God in Heaven, and upon the earth peace and good news to the children of men.

(RT) Glory to Elohim in the highest, and on earth peace and good hope to the sons of men.

(TL) Glory to God in the highest, and on earth shalom to men of good will.

(DL) Glory in the heights to God, and on the earth, shalom among men of his favor.

(LX) Glory be to Allaha in the Highest, and on earth, Peace, and Blessed Hope for all people.

(YN) Glory to Aloha in the heights, and upon earth peace and good hope for the sons of men.

(LG) Glory to God in the highest, and on earth peace and good hope to the sons of men.

(KJV) Glory to God in the highest, and on earth peace, good will toward men. (Rec'T)

(NRSV) Glory to God in the highest heaven, and on earth peace among those whom he favors!

ここにあげたのは、有名な「グロリア」であるが、公認本文が三つの部分に分

けているのに対し、校訂本文は、二つの句に分けている。Godに代わって、Elohim, Allaha, Alohaなどが見られるが、神を表すシリア語（ヘブライ語）の表記であって、特記するほどではない。それは、peaceに代わって、shalomを用いているのが数種あるのと同じである。問題はgoodwillの部分であって、favour (2)、goodwill (3)、good news (1) に対して、(good) hopeが8例あることである。

そもそも、公認本文と校訂本文の異読の問題点は、goodwillが主格であるか、属格であるかの違いから生じたものである。具体的には、peaceの後ろにコンマを置き、区切っているかどうかである。

And on earth peace to men goodwill (主) (公認)

and on earth peace to men of goodwill (属) (校訂)

もちろん、of goodwillというのが、「善意を持った人」という意味なのか、神から「善意を受けている人」なのかは解釈の違いになる。さらに、この詩文全体を対句として見ると、「場所」「主語（何を与えられるか）」「与格（与えられる相手）」の三つの部分からなっている。公認本文の解釈によれば、

場所（で）	主格（が）	与格（に）	（公認）
in heaven	glory	to God	
on earth	peace		
	goodwill	to men	

という形になる。それに対して、校訂版は、

場所（で）	主格（が）	与格（に）	（校訂）
in heaven	glory	to God	
on earth	peace	to men of goodwill	

という二つのきれいな対照文になる。それに対し、セム語の多くは、次のようになっている。

場所（で）	主格（が）	与格（に）	（セム1）
in heaven	glory	to God	
on earth	peace and hope	to men	

ただし、andの位置によって、次のようにも考えられる。

場所（で）	主格（が）	与格（に）	（セム２）
in heaven	glory	to God	
on earth	peace		
	and hope	to men	

「セム２」の形は、形式的に公認本文と近い（goodwillの翻訳が違う）が、セム語に特有な対句を軸とする詩形のことを考えると、おそらく「セム１」がふさわしいように考えられる。ただし、景教のグロリアでは、「セム２」をもとにしたものになっている。セム２の中にも、BK, DL, LXは、公認本文と同じように３つに分けている。全般的に、セム語の特徴は、peaceの後ろにandがあることである。ないのは、TL, DLのみ。そのandをpeaceとhopeという二つの名詞を結ぶandと考えるか、on earth peaceとgoodwill to menという二つの句を結びつける接続詞と考えるかによって、この詩を二つの部分から構成されているか、それとも三つの要素からできているかを区別することになる。「ディアテッサロン」では、Glory to God in the highest, And on earth peace, and good hope to men.となっており、これは、大変おもしろいことに、景教文書と同じである（川口訳：「いと高き所に栄光が主にありますように。大地に平和があまねくありますように。人々には希望がありますように」）。

これまでに提示したことは、セム語からのすべての翻訳が共通の理解をしているわけではないことを示している。

総合して言えることは、原語がヘブライ語またはアラム語の強い影響があるとはいえ、それが原典であることを証明するまでには至らない。何よりも、これを証明する1、2世紀にまでさかのぼることのできる写本がセム語には、二世紀末の写本が一つしかないことが、最大の弱点である。しかし、それが書かれたものであったにしろ、あるいは口頭で伝えられたものにしろ、その背後にセム的なものがあることだけは、言ってさしつかえないであろう。

（３） 本文批評への影響

かりにセム語原典説の方が正しく、原語はセム語であるということが証明された場合、本文批評に影響を与える可能性がある。先に述べたように、宗教改革時

代から19世紀までは、いわゆるビザンチン型本文（公認本文）がギリシア本文として受け入れられていたが、1844年、ティッシェンドルフによるシナイ写本の発見、続いてその出版によって、本文研究は大きく変わった。当時公認本文は、研究の末、最も古い写本でも12世紀以前にさかのぼれないことが分かったのに対し、シナイ写本は4世紀のものであることが判明したためである。これらは、ビザンチン型に対して、アレキサンドリア型と呼ばれており、現在最も信頼できる本文の型であると考えられている。ウェスコットとホートが校訂版を出版し、その流れを受け継いだのが、現在標準版と考えられているネストレとアーラントの校訂版である。もちろん、ギリシア語本文の分類は、さらに詳しく分けられるが、本小論では、ビザンチン型（多数派型とも言われる）を基本とした公認本文と、アフリカ系のアレキサンドリア型に二分する。あまりに単純化しているとおしかりを受けるかもしれないが、小論の性質上お許し願いたい。

現在の本文研究では、公認本文は写本数は多いものの、比較的新しい写本のみであって、より古いアレキサンドリア系の写本が原典に近い形を残しているという考えが主流になってきている。

アレキサンドリアは名前の示す通りアレクサンドロスによって建設されたギリシア都市であって、雰囲気は自由で国際的であった。ヘレニズムの進んだ場所であって、旧約の七十人訳が行われた場所であり、古代教会に与えた影響も大きい。ヒエロニムスが旧約聖書の翻訳を行うにあたって、最初ヘブル原典から翻訳した際、アレキサンドリア派の強い主張によって、ヘブライ原典にない文書も七十人訳から加えたほどギリシア語を優先していた地域である。新約聖書も早い時期にギリシア語で伝えられた可能性は高い。そうになると必然的に古い写本が多いということになる。もちろん、公認本文の正当性を主張する人たちもいるが、一般に本文批評では「古いものは良い」という観点から、公認本文を退けてきた。ところが、もしセム語の写本と公認本文が一致するとすると、その影響を考えざるを得ない。もちろん、公認本文との共通点が見つけられても、どちらからどちらに流れたのか（要するにどちらが原典なのか）を確認することは別問題である。しかし、場合によっては、これが重要になり、今後の本文批評にも決定的な意味を持つ可能性がないとはいえない。

次に、公認本文と現行校訂本文とが異なっている箇所、数か所を比較してみる。

例として引用する翻訳は、日本語では「明治元訳」「ニコライ訳」「永井訳」は公認本文準拠、「新共同訳」他が校訂版準拠、「ラゲ訳」がウルガータ準拠、英語ではKJVが公認本文準拠、その他が校訂版準拠となっている。現在、『ハーザー誌』において、奥山実師が公認本文（多数派本文）に基づいた翻訳を掲載しており、将来単行本として出版される運びになっている。

○マルコ1:2（イザヤ）

（明治元訳）**預言者の録して**

（新共同）**預言者イザヤの書にこう書いてある。**

（ニコライ）**諸預言者に録されしが如し、云く、・・・**

（KJV）As it is written in the prophets,

（NRSV）As it is written in the prophet Isaiah,

（RH）As it is written in Isaias the prophet:

ギリシア語では、公認本文が「預言者（複）」である。それは、次の引用が前半はマラキ書（3:1）から、後半はイザヤ(40:3)からの引用になっているので、それによって修正したものと思われる。ニコライ訳は、複数であることが分かりやすいが、明治元訳では、複数なのか単数なのかは翻訳からだけでは知ることができない。新改訳（校訂版により「預言者イザヤ」としている）の注では、マラキとイザヤの両方の代表としてイザヤをあげているとしている。セム語では、すべて「イザヤ」である。ただし、WLは、この部分、写本が欠落している。

※この点については、セム語は校訂本文と共通である。

○マルコ16:9以下

アレキサンドリアの文書にこの部分が欠けているものが多く、この部分は後の加筆であるとする意見がある。公認本文には、長い結びがある。校訂版による翻訳では、この部分が全くないものと、（ ）で囲んでいるものと、注にしているものがある。日本聖書協会口語訳では、本文にそのまま入っている。新改訳は〔 〕で囲んでいる。新共同訳では、やはり〔 〕で囲み、結び一、結び二と分けて載せている。セム語では、この部分を（ ）にしているのがDLで、残りはすべて本文として存在する。ただ、WLでは8-16は、写本そのもので欠落しているが、その後ろがあるということは、もともとこの部分もあったと考えられる。

※これに関しては、セム語は、公認本文と共通しているように思われる。後の加筆と考える必要はない。

○マタイ5:44（下線は筆者）

（明治元訳、公認準拠）爾曹（なんぢら）の敵（あだ）を愛（いつくし）み爾曹を詛（のろ）ふ者を祝し爾曹を憎む者を善視（よく）し虐遇（なやめ）迫害（せむる）ものの為に祈祷（きたう）せよ

（ニコライ、公認準拠）爾曹ノ敵ヲ愛シ、爾曹ヲ詛フ者ヲ祝福シ、爾曹ヲ憎ム者ニ善ヲ為シ、爾曹ヲ虐ゲ、爾曹ヲ窘逐スル者ノ為ニ?レ、

（大正改訳、校訂準拠）汝らの仇を愛し、汝らを買むる者のために祈れ。

（ラゲ、ウルガータ準拠）汝等の敵を愛し、汝等を憎む人を恵み、汝等を迫害し且（かつ）讒謗（ざんぼう）する人の為に祈れ。

（KJV）Love your enemies, bless them that curse you, do good to them that hate you, and pray for them despitefully use you, and persecute you.

（NRSV）Love your enemies and pray for those who persecute you.

（RH）Love your enemies; do good to them that hate you; and pray for them that persecute you and calumniate you.

それぞれ本文が異なっていることになる。最も長く、詳しいのがギリシア語公認本文であり、次に長いのがウルガータ（ラテン語）であり、最も短いのが、ギリシア語校訂本文である。大正改訳以後の委員改訳は、すべて共通に、校訂本文に準拠している。セム語では、校訂本文と共通するのが、（TL）であり、（DL）はその部分を（ ）で囲んでいる。付加された部分は、いずれも聖書の思想に反するものではなく、ルカ6:27-28、ローマ12:14などから付け加えられたものと思われる。

※『ディアテッサロン』では、Love your enemies, bless them that curse you, do good to them that hate you, and pray for them that receive you harshly and drive you out…となっており、公認本文と同じ。なお、『ディダケー』では、Praise those who curse you, and pray for your enemies; now fast for those who are persecuting you.という文がある。

○マタイ6:13（頌栄）

（新共同）…

（新改訳）〔国と力と栄は、とこしえにあなたのものだからです。アーメン。〕

（ニコライ）…蓋國と権能と光榮は爾に世世に歸す、「アミン」。

（ラゲ）…、（アメン）と。

（KJV）For thine is the kingdom, and the power, and the glory, for ever. Amen.

（NRSV）-----

（RH）Amen.

頌栄の部分は、アレキサンドリア系本文になく、ラテン語ウルガータには、「アーメン」だけがあるが、「国」以下の頌栄の部分はない。セム語でこの部分がないのはTLのみ。DLは（ ）つき。この部分は、歴代前29:11:13を短縮したものであると言われ、初期の教会では一般的に受け入れられていたようである。「国」と「力」と「栄え」のうち、「力」のないのが、BKとWLであるが、この出所については、はっきりしない。『ディダケー』では、For yours is the power and the glory for the age.となっており、「国」が抜けている。なお、『ディアテッサロン』では、For thine is the Kingdom, and the power, and the glory, unto the ages of ages.とあり、公認本文と共通である。

※この部分については、セム語は公認本文を支持している。175年頃に編纂されたと言われているディアテッサロンの「主の祈り」にも、この部分は含まれている。筆者にとっては、アレキサンドリア系とウルガータに、この部分がないと言うことで共通していることの方を不思議に思うが、おそらくヒエロニムスとアレキサンドリア学派の結びつきを暗に示しているのであろう。

○マタイ28:19

（新共同）…彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け

ネストリウス派は、「父と子と聖霊の名」を意図的に削除したのではないかという批判がなされることがある。もし、そうだとすると、問題は大きい。実際には、HWが、Goのみで、「父と子と聖霊」の部分抜けている。WLでは、その部分が全体的に欠如している。そのほかはすべて削除されていない。したがってこの批判は当たらない。

※、意図的に「父と子と聖霊」を除いたという主張は当たらないと考えた方が無難である。

○1ヨハネ5：6－8

（訓点原文）蓋在天作証者三父也道也聖霊也此三者乃一。在地作証者三靈也水也血也此三者亦合歸於一（けだし、天にありて、証しをなす者は三つ、父なり、道なり、聖霊なり、この三者はすなわち一つ、地にありて、証しをなす者は三つ、

霊なり、水なり、血なり、この三者また合して、一に歸す)。

(明治元訳) 證を作すものは三すなはち霊と水と血この三の者の歸する所は一なり

(大正改訳) 證する者は三つ、御霊と水と血となり。この三つ合ひて一つとなる。

(ラゲ訳) 蓋(天に於て證するもの三あり、父と御言と聖霊と是なり、而して此三のものは一に歸し給ふ。又地に於て) 證するもの三あり、霊と水と血と是なり、而して此三つのものは一に歸す。

(ニコライ) 蓋天二在リテ證ヲ作ス者三、父ナリ、言ナリ、聖神ナリ、此ノ三ノ者ハ一ナリ。又地二在リテ證ヲ作ス者三、神ナリ、水ナリ、血ナリ、此ノ三ノ者ハ一二歸ス。

(KJV) For there are three that bear record in heaven, the Father, the Word, and the Holy Ghost: and these three are one. And there are three that bear record in earth, the spirit, and the water, …

(NR S V) There are three that testify: the Spirit and the water and the blood, and these three agree.

(RH) And there are three that give testimony in heaven, the Father, the Word, and the Holy Ghost. And these three are one. And there are three that give testimony on earth; the spirit, and the water …

「ヨハネの句」と呼ばれるこの箇所は、本文批評の上で、しばしば問題になるが、セム語では、「天において」以降の部分を含むものはない。

※セム語は、基本的に校訂本文と共通である。この例で面白いのは、明治元訳は原則として、公認本文をもとにしているにもかかわらず、この部分では、校訂版と一致していることである。宣教師委員たちがKJVを参考にし、日本人助手がブリッジマンとカルバートソンの中国語訳(後の訓点訳)を参照したと言われているが、そのどちらも公認本文に準拠しているにもかかわらず、明治元訳は校訂版を採用していることになる。宣教師たちが、あるいは英語改訳(RV)にかかわる情報を持っていた可能性もある。カトリックのラゲ訳はこの部分を()でくくっている。全体的に、この部分に対しては、疑問が多く、20世紀初頭の時点でも、すでにその解釈が揺れていたことが分かる。

〔考察〕

セム語系とギリシア語公認本文との係わりの強さは、これだけでは証明できない。

以上を見る限り、マルコの結び、主の祈りの頌栄部分などは、公認本文と共通しているが、問題になる1ヨハネの部分は、それを含むものはないということで、すくなくともこれは、後の付加であると考えられる。これからは、セム語は公認本文と共通するところがあるとはいうものの、すべてではなく、独自のものもあることがわかる。ただ、マルコ1.2と1ヨハネ5.8については、ギリシア語公認本文への後の追加と考えられる。すなわち、セム系はそれ以前のもの（ギリシア語校訂版と共通）を踏襲している。

セム語の中で、マタイ5:44では、ウルガタと共通でありながら、6:13では異なっている（ギリシア語公認本文と共通）ものが多い。主の祈りの頌栄の部分は、初代教会でもかなり浸透していた可能性がある。事実、最も古いとされる「ディアテッサロン」でも、この部分は含まれている。

Mt5.44、Mt6.13、Mk16.9については、公認本文と共通する部分が多い。ただし、WLのように、古い写本では欠けているものがある。

筆者は、これらの翻訳に違いがあることを認めつつも、自分の神学によって聖書を変える（改竄する）のでない限りいずれをも受け入れている。ただし、自己の神学主張のために故意に改竄することはあってはならない。たとえば「新世界訳」は、かなり強引に主張に合わせようとするところがある。今回調べた中では、1ヨハネの付加は、聖書の主張には合致するものではあるものの、意図的な改変に近い。

参考文献

1 辞典類

『キリスト教大事典』、教文館、1995。

クラフト、H., 『キリスト教教父事典』教文館、2002。

長窪専三『古典ユダヤ教事典』、教文館、2008。

The Oxford Dictionary of the Christian Church, Oxford, 1997.

Renn,D., *Expository Dictionary of Bible Words*, Hendrickson, 2005.

2 聖書（行末かっこ内は表で用いた省略形）

Hebrew Gospel of Matthew, (Howard), Mercer University, 1995 (HW).

シェム・トーヴ・ヘブライ語

The Aramaic Gospels and Acts, (Pashka), Xulon Press, 2003 (PS).

アラム語

The Delitzsch Hebrew Gospels, Vine of David, 2011 (DL).

デリッチ・ヘブライ語

Aramaic English New Testament, (Roth), Netzari Press, 2010 (RT).

ハブール写本・アラム語

The New Testament, (Murdock), Gorgias Press, 2001 (MD).

シリア語ペシッタ（ディアテッサロン参照？）

The Hebraic-Roots Version Scriptures, (Trimm), Institute for Scripture Research, 2005 (TR).

シェム・トーヴ・ヘブライ語

Aramaic New Testament, (Alexander), ?, 2010 (LX).

アラム語

The Gospels, Tree of Life, 2011 (TL).

このために特別編纂された本文（ネストレで修正）

Holy Bible from the ancient Eastern text, (Lamsa), Harper & Row, 1968 (LS).

古代ペシッタ（モーティマ・マッコリー写本）

Aramaic Peshitta New Testament Translation, (Magiera), LWM, 2006 (MG).

英国内外聖書協会のシリア語新約聖書を使用

The Aramaic-English Interlinear New Testament, (Bauscher), Lulu, 2009 (BS).

アラム語ペシッタ、ギリシア語公認本文との一致を強調

The Earliest Life of Christ, The Diatessaron of Tatian, (Hill), gorgias,

2001.

福音書調和

The Old Syriac Gospels, (in 2 vols), (Wilson), Notre Dame University, 2003 (WL).

古シリア語 (シナイ・パリンプセスト、クレトニア写本)

B'SorotMatti, (Trimm), 2009 (DT).

DuTillet Textより翻訳

MatitYahu, (mistranslated Matthew), (TE).

1553年に教会当局から没収されたdu Tillet写本より翻訳

The Old Syriac Gospels, (Burkitt)(BK), Worldwide Nazarene Assembly of Elohim, 2011.

The Message of Matthew, by Rocco A. Errico,(ER) 1996, Noohra Foundation.

ペシッタ・アラム語と英語の対訳、詳しい注がある。

The Earliest Life of Christ ever compiled from the Four Gospels, being the Diatessaron of Tatian (cir. AD.160). *Literally translated from the Abu al-FarajAbd Allah ibn al-Tayyib*, General Books, 1910.

BeroratHaMashiach, *Good News of the Messiah*, (World English Bible Messianic Edition), 2003.

メシアニック・ジューによる翻訳。ネストレ校訂版より翻訳

The Orthodox Jesish Bible, AFI International Publishers, 2010.

Khabouris Codex (<http://dulshrana.com/khabouris/>) (Lindgren)(LG).

Peshitta (<http://www.peshitta.org/>) (Younan)(YN).

The Diatessaron of Tatian (<http://mb-soft.com/believe/txua/diatess.htm>) (HG).

Diatessaron (http://christianbookshelf.org/hogg/the_diatessaron_of_tatian/title_page.htm) (HG).

Didache (<http://reluctant-messenger.com/didache.htm>).

山浦玄嗣『ガリラヤのイエシュー』、イーピックス、2011。

その他、各種日本語、英語訳聖書参照。

3 書籍

- エウセビオス著（秦剛平訳）『教会史』（全二巻）、山本書店、1986-87。
- エイレナイオス『異端反駁Ⅲ』（「キリスト教教父著作集3/1」、教文館、1999。
- ビヴィン、ダヴィッド他（河合一充訳）『イエスはヘブライ語を話したか』、ミルトス、1999。
- ベイリー、ケネスE.（泉弘次訳）『中東の目から見たイエス』、教文館、2010。
- ヘルマン他（樋口進訳）『よくわかるイスラエル史』教文館、2004。
- 前島誠『ナザレ派のイエス』、春秋社、2001。
- 宮坂亀雄『使徒たちの物語』、日本教会新報社、1978。
- ヨセフス『ユダヤ古代誌』（秦剛平訳）、ちくま学芸文庫、2011。
- リュ・モーセ（上田あつ子訳）『聖書の世界が見える』Duranno, 2011。
- Benner, Jeff A., *The Living Words, A Study of Hebrew Words and Concepts from the Old and New Testaments*, Virtualbookworm.com, 2007.
- Bivin, David, *New Light on the Difficult Words of Jesus*, En-Gedi Resource Center, 2007.
- Black, Matthew, *An Aramaic Approach to the Gospels and Acts*, Hendrickson, 1967.
- D’Ancona, Matthew, *The Jesus Papyrus*, Weidenfeld & Nicolson, 1996.
- Douglas-Klotz, Neil, *The Hidden Gospel*, Quest Books, 1999.
- Elias, Joseph, *Living Words, The Words of Christ in Aramaic-English Interlinear Edition*, Arion Press, 2002.
- Enlightenment from the Aramaic*, Yonan Codex Foundation, 1993.
- Errico, R.A., *Let there be Light*, Noohra Foundation, 2008.
- , *Aramaic Light on the Gospel of Matthew*, Noohra Foundation, 2001.
- , *Aramaic Light on the Gospels of Mark & Luke*, Noohra Foundation, 2001.
- , *Aramaic Light on the Gospel of John*, Noohra Foundation, 2002.

- , *Treasures from the Language of Jesus*, DeVorss, 1993.
- Fitzmyer, J.A., *The Semitic Background of the New Testament*, Eerdmans, 1997.
- Gibson, M.D., *The Commentaries of Isho'dad of Merv*… Vols 1-3, Cambridge, 2011.
- Gordon, Nehemia, *The Hebrew Yeshua vs. the Greek Jesus*, etc., Hilkiah Press, 2006.
- Koester, Helmut, *From Jesus to the Gospels*, Fortress Press, 2007.
- Lamsa, G.M., *Idioms in the Bible Explained*…, Harper One, 1985.
- , *Gospel Light*, The Aramaic Bible Society, 1999.
- Nersessian, Vrej, *The Bible in the Armenian tradition*, The J. Paul Getty Museum, 2001.
- Pick, Bernhard, *The Gospel According to the Hebrews*, Kessinger, 出版年不明。
- , *The Gospel of the Ebionites*, Kessinger, 出版年不明。
- Roberts, Alexander, *Inquiry into the Original Language of St. Matthew's Gospel*, Wipf & Stock, 2009.
- Wilson, Marvin R., *Our Father Abraham, Jewish Roots of the Christian Faith*, Wm Eerdmans, 1989.
- Zaslow, R. David, *Roots and Branches*, The Wisdom Exchange, 2011.
- Greek New Testament, including: Textus Receptus*, etc., Hephæstus Books, 出版年不明。
- 4 インターネット資料
- Aramaic New Testament (http://en.wikipedia.org/wiki/Aramaic_New_Testament).
- Aramaic_primacy (http://en.wikipedia.org/wiki/aramaic_primacy).
- Aramaic Primacy, Hebrew Primacy & Dump the Greek (<http://www.seekgod.ca/forum/showthread.php?tid=292>).
- Categories of New Testament manuscripts.
(http://en.wikipedia.org/wiki/Categories_of_New_Testament_manuscripts).

Comma Johanneum (http://en.wikipedia.org/wiki/Comma_Johanneum).

Complete List of Greek NT Papyri (<http://www-user.uni-bremen.de/~wie/texte/Papyri^list.html>).

East of the Euphrates: Early Christianity in Asia by T.V.Philip, (<http://www.religion-online.org/showchapter.asp?title=1553&C=1360>).

Greek Primacy (http://www.enotes.com/topic/Greek_Primacy).

Hebrew Idioms in the New Testament (<http://foundationsmin.org/studies/idioms.htm>).

List of major textual variants in the New Testament (http://en.wikipedia.org/wiki/List_of_major_textual_variants_in_the_New_Testament).

The original language of the New Testament was Greek (<http://www.sacrednamemovement.com/NTisGreekContents.htm>).

Primacy and Possibility (<http://orvillejenkins.com/theology/primacyandpossibility.html>).

Rabbinical translations of Matthew (http://en.wikipedia.org/wiki/Rabbinical_translations_of_Matthew).

Rabbinical Jewish Versions (http://en.wikipedia.org/wiki/Rabbinical_translations_of_Matthew).

Refutation of Peshitta Primacy (http://fontwords.com/thoughts/refutation_of_peshitta_primacy.pdf).

The Semitic New Testament, the plot to replace the Greek New Testament(<http://watch.pair.com/peshitta.html>) .

Syriac versions of the Bible (http://en.wikipedia.org/wiki/Syriac_versions_of_the_Bible).

Thoughts on Aramaic Primacy (<http://orvillejenkins.com/languages/aramaicprimacy.html>).